

あらずや。あはれ、此魂は金剛石にもまして、堅き寶にあらずや。君を思ひ國に盡す國民のまごころは、實に無形の金剛石なり。よしや有形の金剛石、國內にみち／＼たりとも、日本魂なくば、いかで開明の代に此日本を進むるを得ん。世界の日本をして、鑛物界の金剛石たらしむるも、石墨たらしむるも、みなわれら國民の手にあるなり。つとめはげみて、世界の金剛石をみがけや國民。

金剛石といへば、まづ思はるゝは、かしこければ金剛石の御歌なり。こを心の中にくりかへしつゝ、こよひしも筆をとりぬ。寶石のことを書かんには、玉のことき文こそよけれ、とは知れど、書をへてよみかへすに、瓦にもおとるをいかにせん。光のかたはしだになきをいかにせん。されども、ところ／＼に記したる金剛石の三字は、文の

光なきをおほひやせん、とたのみてかくなん。

明治三十四年五月二十八日 皇后陛下御誕辰に當りて記す

### むだがき

うの花

五月雨の、ふりみ降らすみ定めなく、我宿にのみとぢこもり居て、文机に向ひ、ものゝ本よむとはなしに、古き反古など取出し見るまゝに、去年の今日、友よりおこせたる文をなん、見出しける、なつかしさに、そが寫真とり出て、打見やるにまの當り相見ること、地して、いとうれし、されど今は遠く立別れ、相遇ふとの、難ければ、なつかしさ、いやまさりぬ。思へば幼きより、文よむこと、裁ち縫ふわざも、諸共にはげまし、はげまされ、手とり交して遊びしを、ゆくりなく、立ち

かれしより、早や三とせとぞなりにける。

過ぎにし歳の今日此頃、五月雨のふりしきる夕、  
二人手を取り「故郷の空」てふ唱歌を、うたひ出  
しに、友も我もかたみに涙さしくみて、返しの歌  
は、得うたはずして止みぬ、寫真ながめつゝ、あ  
りしことゝも思ひ出て、西の空なる友を戀ふる  
折しも、ほとゝぎすの一聲高く、雲井に啼きて過  
ぎにけり、あはれ血になくほとゝぎす汝もあはれ  
を告げぬらん思ひもつ身の千々にくだくる我こゝ  
ろ、筆にかりてかくなん友の許に云ひおこせぬ



# 説林

女子の地位は如何に進  
歩し來りたるか

勝又 鄭次郎



太古野蠻の時に當ては世界何れの國に於ても女  
子は男子の附屬物の如し、女子は性來概して柔弱  
なるを以て男子は自由に之を左右し之を賣買して  
怪まず、或は戰爭の賠償として之れが授受をなし  
且腕力を主とする時代の弊風として、之れが資格  
を缺ける女子の地位は甚低かりしが彼の希臘に於